制服の世界
THE UNIVERSE OF UNIFORMS
世界の制服

非常時の制服

制服というと、ふつう考えるのは「毎日着るもの」である。中学や高校に通うとき、あるいは職場において、日常的にみなが身にまとう、画一的なもの。これこそ制服のイメージである。それに対してここでは、「日常」が大きく揺さぶられる場面で登場する制服としての防災服をとりあげる。

木村周平（きむらしゅうへい）
筑波大学助教

身だしなみの対極にあるもの

防災服とよばれるのは、青やグレーなどの地味な色をした、厚地の作業着である。本来は上着だけでなく、ズボンや帽子もセットだ。この服は、消防の制服が起源という説もあるが、いつから使われているのかははっきりしない。しかし、東日本大震災発生時にちょうど内閣府にいた筆者の同僚は、揺れが収まると官僚たちがいっせいに防災服を着て出ていった、と振り返っている。つまり防災服は、いまや省庁や役所のなかで、とっさのときに身にまとえるほどに浸透しているようだ。近年は役所以外でも用意している組織や企業も増えている。

防災服の記憶として筆者が覚えているのは、一九九一年の雲仙普賢岳（うんぜんふげんだけ）の噴火の際、たびたびマスメディアに登場した「ヒゲの市長」こと鐘ケ江（かねがえ）管一（かんいち）・島原市長である。政治家はふつう、人びとからどう見られるかをたいへんに気にする。しかしテレビ画面のなかの市長は、つねに防災服を着、無精ヒゲをのばしたままにしていた。市長はこうした風貌（ふうぼう）をもって、被災地の外にいるわたしたちに、今は見てくれに気を遣っている余裕のない非常事態である、ということを強烈に訴えかけていた。

いろいろな「非日常の制服」が入り混じる災害対策本部（2011年3月、岩手県）

もちろんこうしたふるまい自体が、ある種のパフォーマンスだという見方は否定できない。しかし、東日本大震災の直後、防災服の襟をたてて「着こなした」議員が批判されたように、防災服は日常的な身だしなみの対極にあるものだといえよう。セーラー服のスカートの丈とか、学生服の裏地のもようのように、日常の制服には当事者のちょっとした差異化の余地がある。もちろんそれも先生や校則との攻防のなかでのことだが、非日常の制服では、そうした作為は徹底して避けられている。

防災服がつくり出す境界

とはいえ、防災服はおしゃれという日常を追いやるためだけのものではない。ある防災研究の専門家が防災服を用意した理由は興味ぶかい。自治体の災害対策本部に入りやすくなるため、とのことだった。防災に関する専門的知識や経験のある研究者が支援と調査を申し出ても、緊迫し混乱した災害対策本部に入るのは難しい。そんななか彼が見たのは、被災自治体も防災服を着た別の自治体職員には警戒心を解き、スムーズに協力関係がつくれていた、という事態だった。つまり防災服は、災害対応の「内部」と「外部」とを境界づけるものでもあるのだ。

こうした境界は、時間的な場面でも当てはまる。防災服を脱ぐことは、ある意味で非常事態の終わりの宣言となる。それがいつかは、立場や、誰と向かい合っているかによって異なる。たとえば、東日本大震災発生後、首相をはじめ閣僚は約二十日後に背広の着用を再開した。しかし、筆者が訪れている岩手県大船渡（おおふなと）市の職員は、震災発生後二年がたった今でも、高台移転や防潮堤について市民と話し合うとき、防災服を着用してくる。原発事故で被災した自治体の長や職員もやはり、しばしば防災服姿でマスメディアに登場する。そこでは、震災はまだ終わっていない。かれらが防災服を脱げる日が来ることを、願ってやまない。

ボランティア時の筆者（右側）と学生。消防団の作業服に大学のヘルメット（2011年4月、遠野市）

震災から半年後の復興計画についての委員会。市職員は防災服、それ以外は背広（2011年10月、大船渡市）

出番を待つ郷土芸能の踊り手。震災で壊れた荷さばき場の落成式で。復興の節目で、非日常と日常が交錯する（2013年3月、大船渡市）

みんぱくの防災訓練時の服装。被災地支援とともに館内の防災体制の整備も進めている（撮影・久保正敏）